

登録 / 2006年8月/2007年10月  
登録基準 / 造形の規範となっているもの(本殿及び渡殿)  
国土の歴史的景観に寄与しているもの(祭文殿・北門及び透塀)



photo:Hitoshi Kumamoto

外観。手前が拜殿で、その後ろの祭文殿から横に廻廊が伸びている

# 真清田神社

伝統の形式と近代建築が融合した、尾張造の完成形



拜殿からの眺め。わずかに見える奥の室礼が神秘的

## まちはじまりの神社

歴史ある社寺の名称は、そのまままちな前になっていることがあります。繊維のまち一宮市の「いちのみや」とは、尾張国一之宮の真清田神社のことを指します。

中心街のアーケードの最深部に、まちな喧騒から隔てるような立派な楼門がたち、広々とした境内の奥に真清田神社の社殿があります。また、後ろに控える森の存在が、厳かな印象をより強めています。

よく見ると社殿はいくつかの建物が集まっていることに気がつくでしょう。建物同士は

緑青色の銅板屋根で繋がり、まるで一つの建物のように見えます。この複雑で一体化された社殿のかたち、真清田神社の特徴です。

## 尾張国の一之宮

真清田神社の創建は古代と伝わり、かつては木曾川近くにあったといわれています。また、この辺りを治めていた尾張氏の祖神天火明命を祀り、中世に編まれた『延喜式』の神名帳にもその名が記載されています。



渡殿。厳かな室礼が美しい

一方、門前町から発展した一宮は、近世から近代にかけて繊維産業で繁栄し、神社も興隆しましたが、昭和20年の空襲で社殿を含む境内のほとんどを消失しました。

## 完成された尾張造

日本各地の神社には独自性があり、社殿にもそれが現れています。尾張地方では「尾張造」と呼ばれる、社殿を縦一列に配置する独特の形式があり、真清田神社もその一翼を担っていました。

戦災にあった真清田神社は、昭和22年の復興計画で元内務省神社局の角南隆と森恒保に協力を要請します。二人は焼失前の社殿の位置や大きさ、形式を保ちつつ、機能に合わせて新しい社殿を設計しました。

少し具体的に紹介しましょう。正面の一番手前にある拜殿は、元は巫女が舞踊を行う場所でしたが、手前に切妻屋根の向拝を伸ばすことで参拝者の空間を確保してあります。

奥に続く祭文殿は、かつては左右に伸びる廻廊に開かれた門のような位置づけでしたが、祭祀の変化に伴い大きな空間に変更されました。その奥には神主が祝詞を奏上する渡殿があり、最深部の本殿と連結されています。

ひととき高く掲げられた本殿は、置千木や堅魚木、金の建具で装飾され、社殿全体のクライマックスに相応しい姿となっています。角南は、元は別々に配置されていた建物を一体化させて、機能的な社殿を創り出しました。その一方で、それぞれの社殿は、床や天井の高さと形状、また儀礼の装飾などで空間の違いがきちんと示されています。

真清田神社の社殿は、機能に特化した近代建築と伝統文化、そして地域に根づく社殿形式とが見事に融合した、近代神社建築の名作です。



白砂に浮かぶ本殿

1957年(昭和32年)  
木造平屋建て  
【設計】角南隆・森恒保  
一宮市真清田1-2-1  
<http://www.masumida.or.jp>